

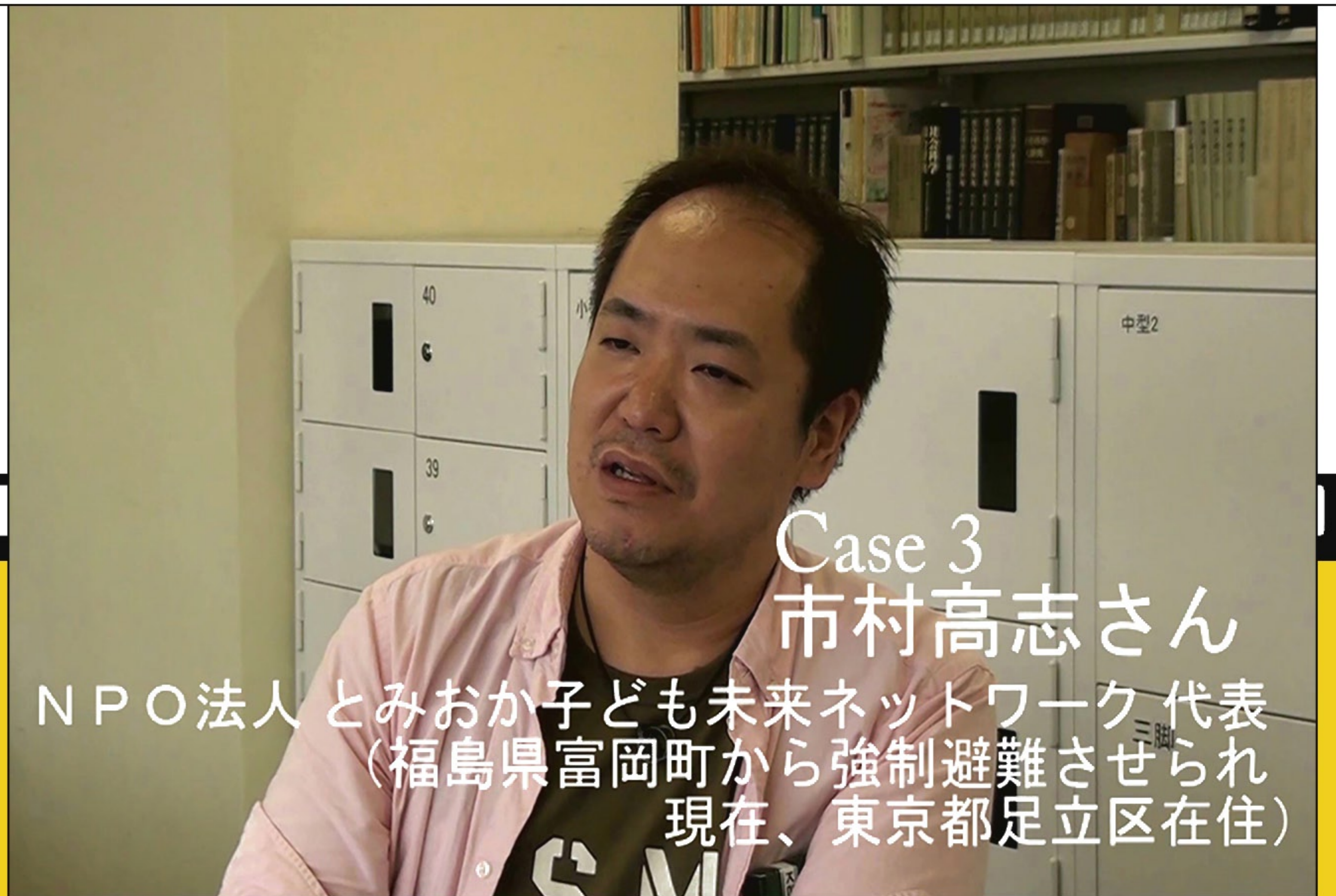
＜社会学的映像モノグラフ＞

## つむぎ合う、未来。

### ーポストフクシマの新しい生き方と社会像ー

福島第一原発の20キロ圏内にある福島県富岡町から避難を強いられ、東京都足立区で避難生活を続けながら、避難者を横につなげる活動をしている人もいる。

沖縄・岡山・東京で取材・撮影を重ね、「語り(ナラティブ)」によって、原発事故とポストフクシマのありようを捉え返し、「未来」を照射する“社会学的映像モノグラフ”。



Case 3  
市村高志さん

NPO法人 とみおか子ども未来ネットワーク 代表  
(福島県富岡町から強制避難させられ現在、東京都足立区在住)

**原発と人生と地域コミュニティの交差**

放射線被曝から子どもを守るために、神奈川県から沖縄県に渡った人がいる。

2011年3月16日に福島県川内村が全村避難指示を発令する前に、川内村を自主的に避難して、生まれ故郷の岡山に戻った人もいる。



Case 1  
奥谷麻依子さん

Le Lotus Bleu オーナー  
(神奈川県大磯町から沖縄県石垣島へ母子で自主避難、後に夫も合流)

**子どもを守る決意と実行**



Case 4  
大塚愛さん

子ども未来・愛ネットワーク代表  
(福島県川内村で7年間生活をし原発事故を機に故郷の岡山へUターン)

**女性性とsociety(社会)**

東京都世田谷区で、放射能汚染の危険から子どもを守ろうとひた走る人もいる。

岡山には、震災が起こったその日のうちに、避難者の支援活動を始めることを友人と共に決断し、素早く動き始めた人もいる。



Case 2  
瀬田美樹さん

世田谷子どもを守る会 共同代表  
(大学進学を機に大分県から上京し現在、東京都世田谷区在住)

**エンパワーメントと自分たちらしさ**



Case 5  
逢澤直子さん

おいでんせえ岡山 代表  
(岡山で生まれ育った生粋の地元民)

**ボランティアと横つながり**

日本大学文理学部社会学科後藤範章研究室が約2年5ヶ月の歳月を費やして制作(調査・取材・撮影・編集)し、2014年3月末に完成した映像作品。